

## 論文

## アサマダキ・アケボノ考

小林 賢 章

同志社女子大学  
表象文化学部・日本語日本文学科  
特別任用教授

## About Asamadaki and Akebono

Takaaki Kobayashi

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts,  
Special Appointment Professor

本稿では、アサマダキとアサボラケという二つの語の意味を考える。これら二つの語は、古典作品に頻出する語である。本稿では、主に平安・鎌倉時代の作品に使用されるこれら二つの語の意味を検討する。ただ、これら二つの語は既にその意味は確定されていると考えられてきた。そのことは、以下、行論の中でも触れることになる。それでは、なぜ、それなのにここで新しく二つの単語の意味を論じようとするのか。

これら二つの語は朝の時間表現の語であるが、その前提、アサ・アシタ（朝）とはなにか、それらの単語と一日の始まりの関係はどうあったのかの理解の間違いが、これら二つの単語の理解にも大きな問題となっていたのだ。ただ、これらの問題は既に、いくつかの拙稿で述べてきたので、ここでは、その概要をのべることにする。

1 当時の前夜から当日朝の時間表現は、ユフベ↓ヨヒ↓ヨナカ↓アカツキ↓アシタとされてきたが、アカツキとアシタの開始時間は同じであった。

2 この時間表現の並びとも関係するが、そのヨナカとアカツキの間が今の時間の午前三時であった。当然だが、アシタ・アサとアカツキの開始時刻は同じだから、ヨナカとアシタ・アサの時間の境界も午前三時である。この午前三時の時間の説明も加えておかなければならないのは、当時の日付変更時点が午前三時であったことである。午前三時になると、キノフ・ケフ・アスなどの日の呼称が変わる。もちろん、これらの呼称は日付と対応しており、日付も変わる。三月・六月・九月・十二月の晦日（尽日）には、春夏秋冬の季節も変わる。そのうち、十二月の晦日（尽日）では、一年も変わるのである。

それ以上に重要なことは、その午前三時になることを動詞アクで表現したことがある。

「明くる朝<sup>アシタ</sup>」は日付が変わって、アシタになることであり、「明くる年」は、日付が変わって明年になる意味だったのである。それが、すべて午前三時を通過する瞬間に行われたのだ。

「明日」「明春」「明年」の「明」はまったく意味が違うように考えがちであるが、古典文学を考える時は、午前三時になるという一つの意味に集約されるのだった。動詞アクが日付について言えば、日付が変わる意味であった。

## 二

この節ではアサマダキを考える。古語辞典の「アサマダキ」の項を見ておく。

A あさまだき【朝まだき】『副』朝早く。「早起きてぞ見つる梅の花夜の間の風のうしろめたさに」〔奈良御集〕（『岩波古語辞典補訂版』）

B あさ—まだき【朝まだき】『副』《まだき》は、まだその時には早い意朝早く。

「―あらしの山の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき」〔拾遺・秋・二一〇〕。「―、まだき来にけりと思ひながら」〔源氏・宿木〕（『古語大辞典小学館』）

「朝早く」とあるのだから、今日の夜明けごろにという意味を言っているであろう。

前節で午前三時からアサであり、アシタであると述べた。この節では、アサマダキの語構成要素のアサが問題となるが、アサは午前三時以降を意味していた。先に結論を述べるが、アサマダキは午前三時になって間もなくの意である。

ここで、二つのことが問題となる。一つは、マダキがどうして早くの意になるかであり、今一つは、語釈の用例はどのように解釈されるのかという問題である。

前者の回答は、戸田茂睡の『百人一首雑談』<sup>(2)</sup>の壬生忠見の「恋すてふわが名はまだき立にけり 人しれずこそ思ひそめし」<sup>(マ)</sup>中の「まだき」につけられた注が詳しいのでそれによることにする。「まだきはやく也、速の字也、伊勢物語の歌「まだきに鳴て」と読む、あるひは「我袖にまだき時雨のふりぬるは」など読るも、みなはやく也、恋をするといふわが名は、はやく立たるものかな、人しれずこそおもひそめしが、なにとる故ぞと云う也」とあるのがそれである。『伊勢物語』中の二つの歌の「まだき」も「速の字也」つまり早い意だが、この忠見の歌の「まだき」も早くの意味だといっているのである。

結論的にアサマダキは「朝早く」の意味になる。ただ、平安時代のアサは現在のアサの意味ではない。前節で見たように、アサ・アシタは午前三時以降を言ったのである。

アサマダキは、「午前三時を過ぎてまだ間もないときに」の意味になる。

『岩波古語辞典補訂版』と『古語大辞典小学館』の用例を解釈してアサマダキの考察を終えよう。

『奈良御集』の「あさまだき起きてぞ見つる梅の花夜の間の風のうしろめたさに」

はこの歌の解釈で問題となるのは「夜の間の」の解釈である。午前三時までが「夜の間の」であった。例えば、「夜もすがらは」は夜ずっとの意味だが午前三時までの時間を意味した。従って、「夜の間の」も午前三時までを意味する。「午前三時になって、間もなく梅の花を見直したことだよ。さつきまで吹いていた夜の風が梅の花を散らしてしまつたのではないかと心配で」となる。

「あさまだきあらしの山の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき」〔拾遺・秋・二一〇〕の歌には、「嵐の山のもとをまかりけるに、もみじのいたくちり侍りければ」の詞書が付けられている。「人が出かけるアカツキ早くに紅葉散る嵐山を通つて来たのだから、寒さの中で美しい紅葉を錦の着物と着ない人はいませんよ。」とでもなるだろうか。

最後の、「あさまだき、まだき来にけりと思ひながら」〔源氏・宿木〕は薫が中の君を尋ねるのだが、その薫を、中の君付きの女房達は勾宮が帰宅したのかと思う場面で使用されている。「あさまだき」は何かの歌の引用と思われるが、その引用歌は不明である。ただ、そう遠くないところから、朝方に男が女のところから帰宅した時間が、「あさまだき」とはわかる。

## 三

次は、アケボノに移る。アケボノはアケとホノの語構成要素からできていることは明白である。そして、「アケ」は動詞アクの体言形であることも明白である。すると、午前三時ころを意味すると思われるが、知られているように、アケボノはもう少し明るい時間帯を意味すると思われるのが一般である。

ここでも、『岩波古語辞典補訂版』と『古語大辞典小学館』の解釈から見ていくことにする。

A あけほの【曙】《ボノはホノカのホノと同根》夜がほのかに明けようとして、次第に物の見分けられるようになる頃。アカツキの次の段階。「まだ―のほどに渡りたまひぬ。かくしもあるまじき夜深さぞかし」〔源氏初章〕。「―やうやう物の色わかるるに」〔源氏橋姫〕。「春は―。秋は夕ぐれ」〔枕一〕。「未明、アケボノ」〔名義抄〕↓あさばらけ。（『岩波古語辞典補訂版』）

B あけ―ほの【曙】「名」夜がほのほのと明け始めようとするころ。「朝明（あさばらけ）よりもやや早い時刻。しのめ。」「暁を取りて、藤原の池のほとりに、つどふ。―「会明 アケボノ」すなはち往く」〔書紀・推古一九年五月〕。「月は有り明けてに光りをさまれるものから、影さやかに見えて、なかなかをかしき―なり」

〔源氏・帚木〕〔省略〕〔野ざらし紀行・芭蕉〕〔古語大辞典小学館〕

ここで面白いのは、『岩波古語辞典補訂版』の〔源氏初音〕からの引用「まだ―のほどに渡りたまひぬ。かくしもあるまじき夜深さぞかし」の用例である。単語の用例は当然その単語の語釈の意味で使用されているはずである。ところが、ここでの「初音」の用例はどうもしくりと語釈と整合しないのである。「初音」の本文をもう少し長く引用しよう。

まだ曙のほどに渡りたまひぬ。かくしもあるまじき夜深さぞかしと思ふに、なごりもただならずあはれに思ふ。

「まだ曙のほどに渡」ったのは、源氏である。その行為に、「かくしもあるまじき夜深さぞかしと思ふに、なごりもただならずあはれに思ふ。」と感じたのは相手の女性、明石の上である。源氏は「まだ曙」に家を後にしている。それに対して、明石の君は「どうしてこんな夜深い時間に帰られるのか」と別れの恨めしさをひどく感じたのである。この箇所の問題点は、「曙」を「夜深さぞかし」と捉える明石の君の感じ方に何か不思議さがある点である。当然こうした違和感は『源氏物語』の注釈者も感じていて、例えば、『新編古典全集』の注釈者は、「空が白みはじめる「曙」は、男が女の所から去る時としてはややおそいが、明石の君は、それでも物足りない。「まだ」や下文の「夜深さ」が事実にはややそむくのは、明石の君の心理に即した叙述だから。」と頭注をつけている。この解釈はいかにも強引な解釈である。ただ、注釈者がこの文の解釈に何らかの問題点を見出していたことはわかる。ここで、期待される解釈は、「曙」が「夜深い」と考えられる解釈である。つまり、「曙」の辞書に示された解釈に問題はないかということである。

#### 四

そこで、『源氏物語』中のアケボノの用例をいくつか見ておく。

我もうちとけて、野宮のあはれなりし曙もみな聞こえ出でたまひてけり。〔賢木〕

昔の御琴ども、かの野宮に立ちわづらひし曙などを聞こえ出でたまふ。〔薄雲〕

これら二つの用例の注を例えば、『新編古典全集』（小学館）の注に見てみると、前者の頭注に、「源氏は夕闇の迫る野宮に御息所を訪ね、翌朝早々に立ち帰った。〔曙〕はその早朝の別れを惜しむ場面。↓〔二〕〔三〕とあり、後者には「↓〔三〕」の頭注が付されている。つまり、「賢木」のアケボノも「薄雲」のアケボノ

も同じ「賢木」の〔二〕〔三〕段落の様子をアケボノと呼んでいるとしている。それで、「賢木」の〔三〕段落（二）段落は夕方出かけて行く場面）はどのように描写されているのであろうか。

やうやう明けゆく空のけしき、ことさらに造り出でたらむやうなり。

源氏あかつきの別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな  
出でがてに、御手をとらへてやすらひたまへる。いみじうなつかし。

御息所おほかたの秋の別れもかなしきに鳴く音な添へそ野辺の松虫

悔しきこと多かれど、かひなければ、明けゆく空もはしたのうて出でたまふ、道のほどこいと露けし。

この二つの歌は、源氏と御息所が別れの場面で詠んだ歌である。この場面の日は、斎宮の下向の直前、九月七日のことである。ここで注意しておかなければならないのは、二つの「明けゆく」という動詞である。「明けゆく」という動詞は暁の時間が経過する意味であって、決して夜が明るくなる意味ではない。それもそのはずで、この別れを源氏は「あかつきの別れ」と詠んでいる。おりから、九月の七日現在の十月初旬頃である。あかつき（午前三時から午前五時）の間に夜が明けることはない。さらに、「あかつきの別れ」、つまり古来時間帯の別れを後に、「野宮のあはれなりし曙」、〔野宮に立ちわづらひし曙〕と言っていることになる。ここでは、アカツキとアケボノの同時性が考えられるのである。

次に、「初音」の「御方々、いづれもいづれも劣らぬ袖口ども、こぼれ出でたるこちたさ、物の色あひなども、曙の空に春の錦たち出でにける霞の中かと見わたさる。」のアケボノの用例である。

#### 五

「曙」が和歌の注釈として使われている用例に次のようなものを見出した。

92 去年も是春の匂ひに成にけり梅さくやどのあけぐれの空

〔あけぐれ〕、あけほの也。あくる時分くらくなるをいへり。〔拾遺愚草抄出聞書〕

右の注釈については少し説明が必要であらう。まず、「あけぐれ」だが、午前三

時を過ぎた時間に暗いことである。ただ、夕月夜の時間で午前三時以降には月が空に存在しないときは、アカツキヤミ（暁闇）というのが一般である。また、午前三時以降に出ている月はアリアケノツキ（有明の月）と呼ぶ。そして、午前三時過ぎに、雨や雪や霧などの理由で月の光りが隠されているのがアケグレだった。また、下文の「あくる時分」は午前三時を過ぎる意味であった。右の文は午前三時以降に暗いのがアケグレなのだが、そのアケグレの時間をアケボノと言うのだとなる。

『岩波古語辞典補訂版』中の用例にも採用されている「春は――。秋は夕ぐれ」（「枕草子」の一段の用例を見ても）。春は――。秋は夕ぐれ。……

「枕草子」の一段の用例を見ても。

春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。（『枕草子』一）

右の文を見るとアケボノは夜が明ける様子であることは譲れない事実である。したがって、「夜がほのかに明けようとして、次第に物が見分けられるようになる頃。」（『岩波古語辞典補訂版』）、「夜がほのぼのと明け始めようとするころ。」（『古語大辞典小学館』）のような語注に問題がないように考えられる。ただ、『枕草子』の用例で注目しておきたいのは、このよう例がアケボノの用例ではなく、「春のアケボノ」の用例である点だ。アケボノは季節として春や夏の用例として使用されることが多いことは、間違いない事実であるが、秋や冬のアケボノの用例がないわけではない。例として、『玉葉集』を見てみよう。『玉葉集』にはアケボノの用例が17例存在する。そのうち三つが秋の部に、二つが冬の部に属している。秋のアケボノが含まれる三首と冬のアケボノが含まれるに二首の歌を見ておこう。

おなじ心を（宝治百首歌めされける時、菽露を） 入道前太政大臣

509 菽はら露にうつろふ月の色も花になり行明ぼの、には

秋歌として 永福門院

546 ふきしほるよもの草木のうらは見えて風にしらめる秋の明ぼの

なが月のころ、伏見殿にまいりて、前大納言時継ふか草

の山庄に、一夜とまりて帰るとて 前関白太政大臣

746 かりにきてたつ秋霧の明ぼのかへるなごりも深くさのさと

家に五十首よませ侍けるに、千鳥を 守覚法親王

922 うら松の葉ごしにおつる月影に千鳥つまどふすまの明ぼの

五十番歌合に、冬雲を 院御歌

987 山あらしの過ぎの葉はらふ明ぼのにむら、なびく雪のしら雲

前三首が秋の部、後ろ三首が冬の部の歌である。これら五首の歌は明るい夜明けの中で詠まれたか、そうでないかが問題となる。509番歌は露に月が映っているというのだが、明るくなっているとはおもわれない。546番歌は葉の裏が白く見えるという、これも明るいとは思われない。746番歌は「一夜」泊まって帰るのだから、これもまだ暗い時間であろう。922番の歌は「月影」が詠まれているから、これも明るくはない。987番の歌は全体が無彩色の歌である。

アケボノは春だけでなく、秋や冬にも使用されることは確認されたし、その時、「春の曙」について言われた夜が明ける状態とは限らないとも言えるのである。

## 六

では、アケボノという単語はどのような意味として存在したのだろうか。右の歌群のうち、746番の詞書「一夜とまりて帰るとて」はアケボノの解釈に参考になる。古典文学で一夜を過ごした人は暁に帰宅していることはよく知られた事実である。また、『八雲御抄（広本）』には、「暁をば、たまをしげ、あけぼの、しの、めと云」記述がある。また、

よもすがら雪ふる夜、物語して、あけぼのに帰り侍りて、  
つとめて、出羽弁が許より

217 おくりてはかへれとおもひしましたしひのゆきさそはれてけさはなきかな（『経信集』）

詞書に、「よもすがら」の後の「あけぼの」に帰宅して、「つとめて」に歌を詠んでいることがわかる。それも、魂が帰宅したのは「けさ」であると歌に詠まれている。先に、暁とアシタの同時性は述べた。そして、ヨモスガラとツトメテの間の時間は暁であるとの予想はつく。すると、アケボノとアカツキは同時ではないのかと思われる。

## 七

アケボノはアカツキと同じ時間を指すと考ええる。アカツキは午前三時から午前五時であるから、アケボノもその時間を指すと考えるのである。



この視点で和歌の作品を見ると、題にアカツキ、和歌にアケボノが存在する歌が多数存在する。ここでは、『秋篠月清集』と『拾玉集』からアカツキとアケボノは同意と考えられる題にアカツキ、和歌にアケボノが存在する歌を引用してみる。

# A 立春暁

3 けふこそは春はたつなれいつしかと景色ことなる明ぼの、空（『清輔朝臣集』）

暁見魚舟

882 あはれなるみ山の春のあけぼのになきおほせたる鶯の声（『秋篠月清集』）

暁

3732 かづらきや山はかすむ山のはにまだ雪しろし春のあけぼの

3733 難波がたあはれもふかき霞かなあしびたくやの春のあけぼの

3734 はつせ山心もそらに成りにけり雲に風まつ春のあけぼの

3735 今さらにおどろかれぬるながめかな春みよしのはるのあけぼの

3736 かへる雁秋をたのむの声すなり月に花見る春の曙

旅宿暁思

4417 草枕秋のころにまどろめばさむる夢路も春のあけぼの（以上『拾玉集』）

春暁花

1555 たをやめのうちたれ髪の花かづら曙かけてにほふ春風（『壬二集』）

右の歌群は題の暁を「あけぼの」で答えていることは明白であろう。ほかに、

# B

初秋風

1141 やはた山にしにあらしの秋ふけばかはなみしろきよどのあけぼの

雪朝眺望

860 ながめやる心にあとはつきにけりあしやのさとの雪のあけぼの（以上『秋篠月清集』）

清集

朝恋、勝、定家卿

1642 いさ命おもひはよはにつきはてぬ夕もまたじ秋の明ぼの

（同じ朝に詠む十首左將軍御許へ奉る〈下略〉）かへし

5313 ただはるのとなりならではやどことに思ひのこさぬ雪の明ぼの（以上『拾玉

集』）

母の思ひにてこもりゐたりし冬、雪のあしたに、大將殿より

2473 三吉のやをばすて山の春秋もひとつにかすむ雪の曙

御返し

2477 おも影のそれかと見えしはるあきのもきえて忘るる雪の明ぼの

おなじとしの雪の朝、大將殿より

2800 人の世はおもひなれたるわかれにて朝日にむかふ雪の明ぼの（以上『拾遺愚草』）

和歌所にて、六首歌合侍りしに、初めの秋の暁の露といへることを

146 秋きぬとまだしもつゆのおきもあへず風に玉ちるのべの明ぼの

同じ百首歌合に、仏名

299 冬ふかき有明の月のあけぼのになりて出づるくものうへ人（以上『隆信集』）

題詞にアカツキがあり、歌の中にアケボノがある用例をまず引用した。実はその用例は多数存在する。すべてを引用するのは難しいので、その一部を右に引用した。『清輔朝臣集』から『壬二集』までの A の歌群を引用しているとき、「春のあけぼの」引用が多いことに気が付く。繰り返すが、こうした用例は他にも多く存在する。

それでは秋や冬のあけぼのはやはりその季節のアカツキの時間と重なるのかという疑問が生じた。『隆信集』の 146 番歌を見つけたときは一安心した。しかし、こうした用例はこの一例だけであった。ただ、題詞にアシタがあり、歌中にアケボノがある季節が秋や冬の用例は右のように見つけることができた。先に述べたように、アカツキとアシタの少なくとも開始時刻は同じ時間であった。とすれば、これらもアケボノはアカツキの異名として、使用されていることを証明する用例となる。

ただ、『秋篠月清集』の 1141 番歌と『隆信集』の 299 番歌には少しの補注が要ろう。

『秋篠月清集』の 1141 番歌は「初秋風」という題が意味を持つ、初めての秋風である。淀川に西風（秋の風）が吹いた。折しも曙。淀川の白波は初秋風が波立てたのだなあ」といったところで、アケボノをアカツキの時間にとらないと「初秋風」にならないのだった。

『隆信集』の 299 番歌は歌中に「有明の月」がある。「有明の月」はアカツキに出ている月のことだった。「有明の月」はアカツキの異名であった。とすれば、「有明の月のあけぼの」はアケボノとアカツキの同時性は論を俟つまい。

最後に一首、『後鳥羽院御集』の

冬  
56 秋くる、鐘のひびきはすが原や伏見のさとの冬のあけぼの

の歌を解釈しておこう。秋が終わって冬が来たよ。曙（の到来）に菅原の伏見の里の野寺の鐘が鳴っている。あれは、暁の鐘、秋が去り冬が来たことを告げる鐘だよ。

## 八

以上述べた結論は、曙は午前三時から午前五時の時間を表す時間表現であった。もちろん、季節に関係なく一年中使用できる。だから、本稿冒頭に紹介したように、夜が明ける意味ではない。それでは、現在を含めて今までどうして夜明けといった解釈がなされてきたのだろう。曙は季節と結びついて使われることが多い単語だが、秋冬に較べると春夏の曙を詠んだ歌が圧倒的に多い。春と夏に関して言えば、暁の時間に夜が白むことは事実である。そうした背景で曙は夜明けの意味と捉えられたのであろう。もちろん、『枕草子』の一段の有名な記述がその解釈に大きな影響を与えたことは申し述べるまでもなからう。

## 注

- (1) 拙稿「アサボラケ考」(同志社女子大学学術研究年報63号 二〇二二年)
- (2) 『戸田茂睡全集』(昭和44年 国書刊行会刊)
- (3) 石川常彦校注『拾遺愚草古注 上』(昭和61年 三弥井書店刊)
- (4) 和歌の引用は、特に断らない限り『新編国歌大観』によった。